

今週の為替相場見通し(2021年9月27日)

総括表		注	先週の値動き		今週の予想レンジ
			レンジ	終値	
米ドル	(円)		109.12 ~ 110.79	110.74	109.70 ~ 111.70
ユーロ	(ドル)		1.1684 ~ 1.1756	1.1722	1.1600 ~ 1.1850
(1ユーロ=)	(円)		127.93 ~ 129.83	129.83	128.00 ~ 131.00
英ポンド	(ドル)		1.3610 ~ 1.3756	1.3670	1.3550 ~ 1.3750
(1英ポンド=)	(円)	*	148.96 ~ 151.74	151.41	150.00 ~ 152.50
豪ドル	(ドル)		0.7221 ~ 0.7316	0.7257	0.7150 ~ 0.7350
(1豪ドル=)	(円)	*	78.85 ~ 80.77	80.41	78.80 ~ 81.30

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

市場営業部 為替営業第二チーム 甲斐 貴之

(1)今週の予想レンジ: 109.70 ~ 111.70 円

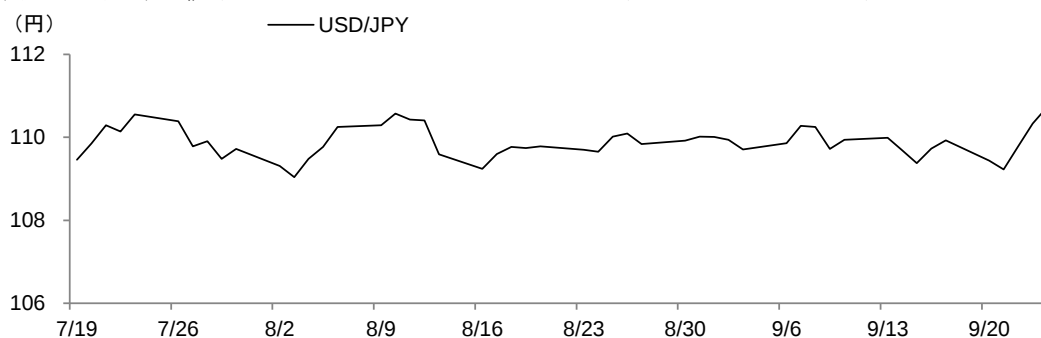
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は週後半に上昇した。週初20日、110円付近でオープンしたドル/円は日本・中国本土が休日で薄商いの中、中国不動産大手企業を巡るデフォルト懸念を背景にリスク回避の動きが強まり、109円台前半までじり安の動きとなった。21日、ドル/円は中国市場の信用不安が燃る中、実需フローにサポートされ海外時間で109円台後半まで小幅に上昇も、その後はドル売りに転じ、米株の軟調推移を背景に109円台前半まで続落した。22日、ドル/円はオープン直後に一時週安値の109.12円をつけた後、米国時間にFOMCを控える中、様子見ムードとなり狭いレンジでの推移が継続した。海外時間ではFOMC声明文にて早期のテーパリング開始が示唆され、パウエルFRB議長の見解がこれまでになくタカ派であったと受け止められ、ドル買いが加速して109円台後半まで急上昇した。23日、ドル/円は前日のFOMCの結果を受けたドル買い地合いが継続。米株の堅調推移にじり高の展開で110.35円まで上値を伸ばした。24日のドル/円は、中国不動産大手企業のデフォルト懸念の後退や連銀総裁からのタカ派コメントが続いたことで一時週高値の110.79円まで上昇し、110.74円で越週した。

今週のドル/円相場は8月中旬からの高値を超え、111円台が視野に入ってきた。11月のテーパリング決定が濃厚となったことや、ノルウェー中銀会合がタカ派色を強めたことなど主要国金利の上昇圧力が高まったことで、米長期金利が再び7月初旬以降の1.45%台まで上昇した。今後の経済指標で堅調な数値が確認されることで、もう一段の上昇が見られるかには注目したい。ただし、中国不動産大手企業を巡るデフォルト懸念については、一旦、落ち着きを見せているものの、一部ドル建て債利払いに関しては猶予期間に入っているものと思われ、依然として、不透明感が残り、上値が重い展開となる可能性もある。今週は27日(月)に米9月ダラス連銀製造業活動指数、28日(火)に米9月消費者信頼感指数、30日(木)に米4~6月期GDP(確報)、米4~6月期コアPCEデフレーター(確報)、10月1日(金)に米9月シシガン大学消費者マインド、米9月ISM製造業景況指数が発表予定となっている。

(3)先週までの相場の推移

先週(9/20~9/24)の値動き: 安値 109.12 円 高値 110.79 円 終値 110.74 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

市場営業部 為替営業第一チーム 山岸 寛昭

(1) 今週の予想レンジ: 1.1600 ~ 1.1850 128.00 ~ 131.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドル相場は、方向感なく推移。週初20日、1.1730 付近でオープンしたユーロ/ドルは中国不動産大手企業の信用不安を受けリスク回避の動きが強まり、欧州株の軟調推移に下値を切り下げたが、その後は米長期金利低下を受けたドル売り圧力もあって値を戻した。21日、リスク心理の改善が見られないながらも、1.17台半ばまで上値を伸ばしたが、その後はリスク回避のドル買い圧力に押され1.17台前半まで反落した。22日、ユーロ/ドルは一時週高値の1.1756をつけたが、その後のFOMCの結果を受けてドル買いが強まり、一時1.16台後半まで急落した。23日、ユーロ/ドルは前日の流れを引き継ぎ、1.1684と前日の週安値を更新したが、その後はリスクオフの後退と独金利の上昇にサポートされて1.17台半ばまで大きく反発。24日のユーロ/ドルは、FOMC後から続くドル買いの動きが出たことに加え、中国人民銀行が暗号資産関連サービスを禁止すると発表したことがドル買いユーロ売り材料となり、1.1722で越週した。

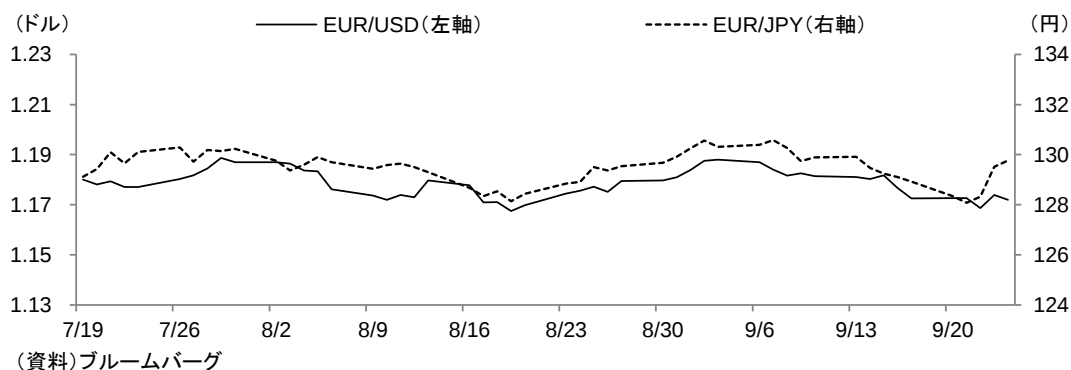
今週のユーロ/ドル相場は、上値の重い展開を予想。正常化を着実に進めるFRBに対して、ECBは今月の政策理事会で債券購入ペース縮小を決めるも、緩和終了に向かう「テーパリングではない」とラガルドECB総裁は説明。欧米の金融政策格差がユーロの上値を抑える要因となりそう。今月発表された独9月ZEW景気指数、ユーロ圏9月製造業PMI、独9月IFO景況感指数がいずれも前月比で落ち込むなど、デルタ株と供給制約の影響から足元景況感が悪化。来年3月に緊急買い取り制度(PEPP)の期限が到来し、通常の量的緩和政策(APP)と合わせた今後の枠組みが年末に向けて議論される予定だが、景気先行きへの不透明感から、緩和縮小に対して当面は慎重姿勢が続くとみられる。中銀関連のイベントでは、欧州版ジャクソンホール会議とも呼ばれるポルトガルのシントラで開催のECBフォーラムにて、28日(火)ラガルドECB総裁が講演する予定。そのほかでは、中国不動産大手企業の経営不安についても注視が必要。連鎖的な金融不安には至らないとの見方が多いが、今後も債務支払い期限が到来し、リスク回避の動きから対ドル・対円でユーロ売りが進む展開には注意。また26日(日)に投開票されたドイツ連邦議会選挙の結果にも注目が集まる。どの政党も単独過半数の確保は難しく、連立協議が難航すれば政治空白長期化への懸念からユーロ安要因となりそう。

(3) 先週までの相場の推移

先週(9/20~9/24)の値動き:

(対ドル) 安値 1.1684 高値 1.1756 終値 1.1722

(対円) 安値 127.93 高値 129.83 終値 129.83



3. 英ポンド

欧州資金部 本多 秀俊

(1) 今週の予想レンジ: 1.3550 ~ 1.3750 150.00 ~ 152.50 円

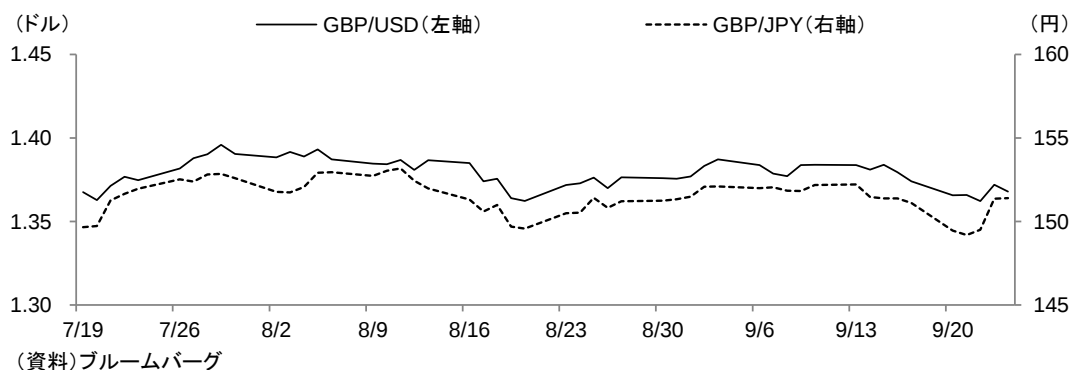
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、比較的狭い値幅を上下動し、週を振り返って、対ドル、対ユーロでは水準を小幅切り下げた一方、対円では水準を小幅切り上げた。市場の関心は、米連銀公開市場委員会に集まっており、その結果が発表された22日までは、対主要通貨で、ポンドは、方向感に乏しい軟調気味の推移を続けた。米連銀公開市場委員会は、従来よりも心持ち鷹派的な結果と受け止められた。資産購入縮小（テーパリング）の11月発表、年内開始、22年末までの終了は、市場の予想通りと言えたが、利上げ開始のタイミングについては22年末か23年初の境界線上で、22年末の可能性が現実的に浮上したことが、従来予想よりも若干「前倒し」と読まれたようだ。ただし、前後してのドルの値動きは、「噂（期待）で買って、事実で売る」といった反応で、一連の結果発表直後、ドルは全面高に振れたものの、その後、対円を除いて頭打ちから反落に転じてしまった。円安だけが週引けまで続いたのは、リスク許容の動きと解釈された。週初、中国大手不動産会社債務不履行懸念の広がり、リスク回避の円全面高を招いていたが、その後、同不動産会社については、（2008年金融危機のように）世界経済を広範に巻き込むよりも、中国国内にとどまる問題との認識が広く共有されたことが、リスク許容の動きにつながったものと考えられた。23日の値動きはポンド全面高と言えたが、こちらは、同日発表の英中銀金融政策委員会が、早期利上げに積極的な姿勢を示すとの期待感を背景とした。実際、この日の結果は従来よりも早期利上げに積極的と読むことができたものの（後述）、やはり「噂（期待）で買って、事実で売る」反応に、ポンドの堅調は1日しか続かなかった。

今週の英ポンド相場は、軟調を予想。英中銀金融政策委員会は、①物価予想の上方修正 ②資産購入規模縮小への投票が1票から2票に増えたこと ③資産購入策の終了前に基準金利引き上げに踏み切る可能性を示したなどといった点が、従来よりも鷹派的と読まれた。特に、③は、（資産購入策終了から利上げ開始までに相応の期間を置くとした）米連銀とは対照的な姿勢を言え、興味深い。ただし、足下米英経済を比較すると、確かに賃金上昇圧力だけは英国の方が強いようだが、（消費者）物価、消費、生産、雇用など、国内経済の動向を示すその他経済指標の回復は、大差ないか、米国の方がむしろ先行しているように見える（物価上昇を「回復」と言うには違和感があるが）。米連銀利上げ開始時期を巡る思惑が来年末か再来年初のいずれかで揺れている現状で、英中銀利上げ開始のタイミングが、「早ければ22年末」「場合によっては21年末までにも」などと、米のそれに先行するというイメージは、すんなりとは腑に落ちない。英中銀には、確かに、「雇用の最大化」という、米連銀にある目標は設定されていないものの、雇用という目線では、今月末に一時帰休制度が終了する英労働市場の先行きの方が余程不透明感が高い。中銀の目標にないからといって、英中銀が考慮外にできる話ではないのではないのか。また、未だに大型インフラ支出の可能性を議論している米政府とは対照的に、英政府は、増税に向けて舵を切るなど、はっきりと緩和から緊縮に向けた財政政策の方針転換に向けた姿勢を示している。財政政策が引き締めに転じると並行して、英中銀があつさり金融引締め進められると見込むのにも、また、無理があるのではないのか。足下、市場の思惑が英中銀早期利上げに前のめりになっているように見える分、目先は、ポンド下振れ余地の方が大きいように感じられる。

(3) 先週末までの相場の推移

先週（9/20～9/24）の値動き: (対ドル) 安値 1.3610 高値 1.3756 終値 1.3670
(対円) 安値 148.96 高値 151.74 終値 151.41



4. 豪ドル

市場営業部 為替営業第一チーム 鈴木 智大

(1) 今週の予想レンジ: 0.7150 ~ 0.7350 78.80 ~ 81.30 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドルは、比較的狭いレンジ内で方向感のない推移となった。週初20日は0.7263でオープン。中国大手不動産会社のデフォルト懸念を背景としたリスクオフ寄りの動きに、豪ドルもやや売りが優勢。一時週間安値となる0.7221まで下落した後、株式市場が持ち直す動きに0.72台半ばまで値を戻した。21日は0.7280近辺まで上昇する場面も見られたが、欧州時間に入り下落に転じ、0.72台前半でクローズ。22日は中国大手不動産会社が債券の利払いを実施との報道に市場に安心感が広がり、買いが入る場面も見られたが、米国時間にFOMCを控え上値は限定的。そのFOMCでは「早ければ11月にもテーパリング開始」とタカ派寄りの発言が見られる中、株式市場も堅調に推移し、一時0.73手前まで上昇したがレンジ抜けまでは至らず。その後は0.7250付近で乱高下を繰り返すのみとなった。23日は中国の信用不安が一旦は和らいだこともあってか、欧州時間入った後に各国株式市場が更に上昇する動きに、豪ドルも買いが優勢となり、米国時間には0.73台を突破。その後も高値圏での推移が続き、0.73台手前でのクローズとなった。24日は前日から続いた株式市場の上昇に頭打ち感がみられる中、米長期金利は上昇を続け、為替市場では全面ドル買い。豪ドルもこの流れに徐々に押され、0.72台半ばまで下落し、0.7257で越週した。

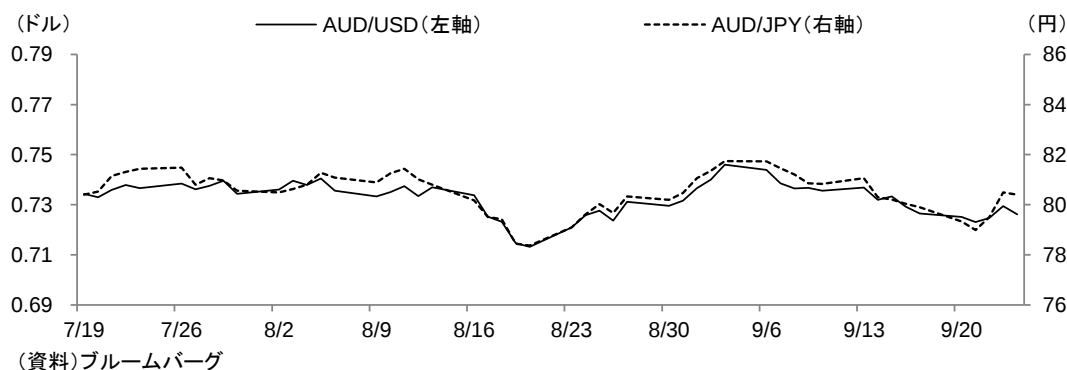
今週の豪ドルは上値の重い推移を予想する。中国政府の対応によってはがらりと環境が可能性もあるが、中国大手不動産会社のデフォルト懸念は依然として燦っており、株式市場をはじめ一部リスクオン寄りの動きも見られてはいるものの、中国との結びつきが強い豪州への極端な資金流入はなかなか考えづらい状況。また、先週のFOMCでパウエルFRB議長が発言したように、FRBがテーパリングに向けて着々と歩を進めている中、RBAは依然として慎重な姿勢を崩しておらず、金融緩和縮小に対する当局のスタンスの差も、上値を抑える要因になるのではないかと。豪州特有の材料というよりは、米国、中国の動きが値動きに影響を及ぼす状況にあるといえよう。来週の主な経済指標として、28日(火)に豪9月小売売上高、10月1日(金)に豪9月製造業PMI速報の発表が予定されている。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(9/20~9/24)の値動き:

(対ドル) 安値 0.7221 高値 0.7316 終値 0.7257

(対円) 安値 78.85 高値 80.77 終値 80.41



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。